

あすま・ひろき 1971年東京都生まれ。国際大学グローバルコミュニケーションセンター教授・哲学、表象文化論。著書に『存在論的、郵便的』『動物化するポストモダン』など。



◆孤立と抑鬱

2006-1-①  
橋爪 われわれ団塊世代が新人類や団塊ジュニアと違うのは、自分たちを同質な集団と考えるのが難しく、同世代でも互いが思いきり違っていたこと。学校には、いろんな子がいた。テレビがないから話が合わ

# 共感も抵抗もない思想

ない。弁当のおかずも違う。聞いている音楽も違う。階層なんて当たり前。それがだんだん中流の枠に収まっていったわけです。  
東 60年代生まれの新人類は、テレビで世界的な共通感覚が演出された。90年

代はメディア自体が多文化したため、団塊ジュニア以降の世代はそういう共通体験があまりない。そこで出てきたのが、小林よしのりに代表されるポピュリズムと純愛チームのような内向的傾向。世界と自分のつながりを回復したいけれど、大きな物語が見つからないという傾向が見られます。  
◆マルクスとの格闘  
橋爪 私は72年ごろまでマルクス主義者でした。マルクスには、階級、所有、

# 「死んだ」マルクス主義

## 超・世代論

団塊VS団塊ジュニア

②  
団塊世代と団塊ジュニア世代の対話を通じ、戦後文化のあり方を検証する「超・世代論」の第2回は、社会学者の橋爪大三郎氏(57)と哲学者の東浩紀氏(34)。戦後思想に大きな影響を及ぼしたマルクス主義の受容と克服をめぐる、価値観の異なる二つの世代が火花を散らした。

ロンドンのハイゲート墓地にあるマルクス像(1988年12月)＝A.P



た。ところがインターネットなどが発達した現在では、富の格差は必ずしも知の格差を意味しない。「動物化するポストモダン」で僕が言いたかったのは、現代社会は、ある領域で人間的で主体的に振る舞うこと、他の領域で「動物的」に生きる「ことごと」のなかで両立してしまっていること。実際、ひきこもりやニートが「下層階級」とは言えない。人間性と動物性が組み合わさった解離的な生活スタイルが、モザイク状に織りなすことでいまの世界は作られている。こういう世界を分析するには、たいてい複雑な言葉が必要になります。

# 橋爪大三郎 × 東浩紀

東 難しいです。僕らに比べて、誰のために言葉を使うのか、何のために学問をやるのかをまず考えなければなりません。  
橋爪 なぜ学問なのか考えないのに学問が始まってしまったりが不思議です。まず本人が信じなければ、何も生まれないと思っています。  
東 僕がジャック・デリダについての仕事を始めた理由はそこにあります。いわゆる「現代思想」は冷

戦以前の問題を引きずった小さなゲームでしかないと感じるようになった。冷戦後はアイデンティティが大事になりましたが、僕は男性、東京都出身、在日でもない。マイノリティのような根拠がない。だから僕は現代思想を学んで、結局それを精緻化させている。マイノリティだから、解剖台を乗り越えていく。同時代に対する批評だと思えば、現実を語っている。マイノリティだから、

# 今の言葉で構造「解剖」

東 それを信じたいけれど……。一世紀以上続いたマルクス主義の思想が抜けてしまった後、いきなり「君たちの言葉で実感をつかまえて」というのは大変むずかしい。  
橋爪 東さんたちが、とても気の毒な世代だということがだんだんわかってき



はしつめ・たいさぶろう 1948年神奈川県生まれ。東京工業大学教授・理論社会学、宗教社会学。著書に『言語／性／権力』など多数。近著は『隣のチャイナ』。

東 僕らは消費社会を10代で経験し、20代でパウルが崩壊した。経済的な目標がなく、国家的アイデンティティも誇りに思えない。すでに中流は達成されているので、特に頑張る必要もない。そうした抑鬱的な状態が続いたのが、団塊ジュニア世代の90年代だったと思います。  
橋爪 団塊の世代は、世界の一員だという確信を持つために、政治運動に向かったわけですが、ある意味とても文学的だった。サル

# 文化

人間のはかなさを実感  
東 僕が最近の階層化社会論は疑問に思っています。昔は、知の獲得にお金がかかったので、富の配分と知の配分は運動している。複雑な状況を無理

の生と死にほんとうに人間のほかなさを感じて得なかつた。それでも、東さんを鼓舞するかのような橋爪さんの語りから、確信を持って何かをつかみ取るという営みの「高貴」のようものが伝わってきた。(植)

2006年(平成18年)1月5日

理系の研究者が専門外の現代社会を論じたエッセーが売れている。今の日本社会にも申す——などのメッセージを放つ本は常に書店の一角を占めているが、社会学などベテラン評論家による分厚くて小さな文字の本ではなく、新書に代表される手軽で平易な文体的本が目立ち、ベストセラーになっているのが特徴だ。背景を探った。

【岸桂子、手塚さや香】

◇半年で200万部

新潮社は先月上旬、数学者の藤原正彦さんが執筆した「国家の品格」(新潮新書)を、一挙に40万部増刷することを決めた。新書の一回の増刷としては「おそろく前代未聞の数字」(新潮新書編集部)。その後も増刷を重ね、日現在で計197万部となり、昨年11月の刊行以来、半年で200万部に達するのは確実だ。

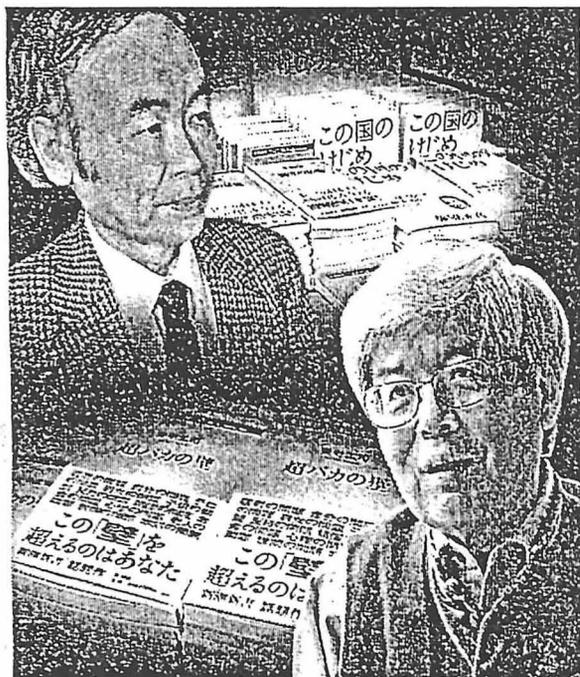
「国家の品格」は、米国追従一辺倒の政治からの脱却を説き、武士道精神など日本人が持っていた価値観や美徳を取り戻すべきだと明快な文章で主張したエッセー。藤原さんは「若き数学者のアメリカ(77年)なぐり」に満ちた多数のエッセーを発表しているものの「国家のありよう」を明確に打ち出したのは初めて。自身「こんな売れ方は普通じゃない」と戸惑いを隠さないが、ヒットの要因を四つのポイントを挙げて分析した。

「文系だと右、左の色がついて中身も類推できるが、理系は色がつきにくい。だから読者は『何を書いているのか』と興味を持つ。第二に、常に視線を世界に広げているから、日本の良さも悪さも自信を持って発言できる。第三に、自説をはっきり主張する人が少ない文系に対し、理系は直線的で主張が明快。第四に理系は斬新で勝負している。この本も、他の本にはないノンフィクションがいくつか書いているので、読む人は興味を

大局観に世間が期待

藤原正彦さん、養老孟司さん……

エッセー人気 理系文化人



持ってくれたのではないのでしょうか」

新潮新書からは、415万部と新書の最高部数を更新し続けている養老孟司著「バカの壁」(08年)も生まれた。養老さんは解剖学者だが、「バカの壁」も現代社会について論じた本。つまり、超ベストセラー2冊は、理系学者が専門分野の外に向けた論評となっているのだ。

◇拒否反応薄れ

ただし、「理系」は必ずしもキーワードでないという指摘がある。大手出版社の理工書担当編集者は「読者の立場で考えると、数学者や解剖学者の本であることを意識して買っているかどうかは疑問だ。2人とも文章がうまく含蓄があり、読んでみると『数学者と情緒』のような意外な組み合わせの面白さがあった」と話す。

社会論に限らず「理系」人による本への抵抗が薄れているという見方も。ジュンク堂書店池袋本店の文芸担当者は「小川洋子さんの小説『博士の愛した数式』(新潮社)のヒットを契機に、数学入門書も売れています。これまでは理系の人の執筆というだけでちゅうちょされがちだった本が、違和感なく受け入れられつつあるのでは」と話す。

◇「大家」の不在

かつて、文化芸術から社会時評に至るまで常に発言を期待された人として、作家の司馬遼太郎さんがいた。

養老、藤原両氏に社会時評を依頼した理由について三重博一・新潮新書編集長は「独創的な視点を持ち、固定観念にとらわれない柔軟さがあるから。理系

識者はこうみる

寺門和夫氏

サイエンスウェブ編集長  
(科学ジャーナリスト)



科学を極めた専門家はそれなりの自然観、社会観を持っているから、文系の専門家

の自然観、社会観と違う見方ができる。その発想が面白くて独創的だから受け入れられているのだろう。そういう人たちが学術論文ではなく、一般向けのエッセーを書い

橋爪大三郎氏

東工大教授(社会学)



理系文化人が政治や社会を論じた本が支持される背景には、

「言論のゴミため化」の進行がある。冷戦後、右、左という対立軸がなくなり、イデオロギーがリセットされた。さらにネット上の巨大掲示板などが登場し、オピニオン誌などに代表されるいわゆる「高級な言説」と、出所

文系との境界なくなった

たり分析したりというのは新しい局面かもしれない。新しい問題提起として考えるべきかと思う。つまり、新しい視点で物事を考えなきゃいけない時代になってきたということではないか。

背景として理系と文系の境界がなくなっている現状がある。学問を理系と文系に分けるという明治以来の考え方が不可可能になってきた。教育や社会現象、犯罪を社会科学の観点から分析する方法もあるが、理系の立場から見ると異なる分析が可能なのも多いし、実際に発

背景に言論ゴミため化

の分からないうわさ話との区別がつかない言論のゴミため状態になった。政治も劇場化によってサブカルチャーになり、一部の医師や弁護士はタレント化する。こういう状況で「何を信じていいのか分からない」という方向喪失感覚が生まれる。その中で信頼できる存在として理系が注目されるのではないか。

理系の学問は、客観的法則や事実、物質が存在するところからスタートしているから信頼できそうに感じられる。理系離れと言われて久しいが、養老氏ら

を意識したわけではない」とし、たうで「2人とも文系理系の枠に収まらない『知性』を持っている。読者は今、大柄な構えをもった思想を説く人を求めている気がする」と話し、専門性に縛られない大局観をもつ人の登場を願う世間の期待が、養老・藤原本のメガヒットにつながったという分析に共感を寄せる。

藤原さんは「司馬さんのような広い視野は、文化や芸術、歴史、思想という一見何の役にも立たないような教養がなければ身に着かない。そんな人は多くは登場しないけれど、活字文化の衰退と、政治家でさえ大局観を喪失している現状を考えると、出現の頻度はますます低く

なるだろうと将来を懸念する。ライターの水江明さんは「専門バカ」ではない、「長屋の隠居」的な存在はいつの時代にも求められる。文系は70、80年代にイデオロギーに左右されて権威を失ったりしたが、理系の人たちは、世界観の変化の荒波をそんなに受けずに済んだのでは」と語る。

「理系文化人」ブームは今後も続くのか。注目されている一人が、1962年生まれの脳科学者、茂木健一郎さんだ。文理の垣根を壊した論壇・研究活動が光り、昨年は小林秀雄賞を受賞。茂木さんの新刊も出した三重編集長は「ポスト養老・藤原は常に探っています」と打ち明けた。

言する人も増えてきた。人口の問題も環境と関係しているし、宗教対立や紛争などの背景も科学的に分析できる点がある。これからの社会は理系の知恵をもっと利用する時代に入った。

ただ、昨今ベストセラーになった本は、著者のパッションリテューという要因も大きく、「理系の文化人」というくくりでとらえるのが難しいところもある。この先、文系の文化人が理系のテーマを書いた本がベストセラーになることもあるかもしれない。

また、文系の知識人が文系の異分野で発言する場合、既存の常識をひっくり返すことを意図しているために、読者には難解で説教臭く感じられる。その点、理系知識人が文系のテーマを論じる場合は「こんなこと考えてもみなかった」という意外な点を突いてくるため、常識を捨てるといった抵抗感が少なく、関心を持たれやすい。

(談)



# 調和社会 構築の 原動力に



胡鞍鋼

フー・アンガン 1953年生まれ。中国・清華大教授(経済学)。中国科学院自動化所卒(工学博士)。中国指導部に近い政策学者。著書に『かくて中国はアメリカを追い抜く』。

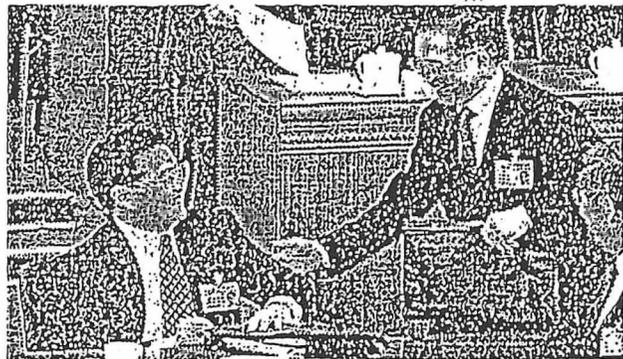
私は過去15年あまり、中国の党や政府に、経済政策の提言を続けてきた。だが近年、中国の主要な課題は、経済から社会に移りつつある。中国社会は転機にあり、多くの長期的・構造的な問題が噴出している。これらについて、説明したい。

第一は、経済成長がさまざまな社会矛盾をもたらす、「社会赤字」(社会のマイナス)が拡大したこと。国有企業や郷鎮企業から、累計6,000万人にもものぼる「失業の洪水」が生まれた。人びとの所得は伸びたが、それ以上に所得の格差や不平等が拡大した。胡錦濤主席が、2020年までに「社会主義和諧社会(調和社会)」を建設しようとしているのは、こうした背景からである。社会赤字を社会黒字に転じるのだ。

## 胡錦濤政権 四つの挑戦

第二は、共産党の政治資産が失われつつあり、「政治赤字」が拡大していること。中国政府は、経済のマクロ調整をやりとげ、アジア金融危機を乗り切り、SARS危機を処理して自信を深め、政権担当能力をますます強めている。その最大の敵は、むしろ政権内部の腐敗である。経済成長の結果、国家財産(公共財政、公共投資、国有資産、国有資源など)が蓄積されたが、腐敗、乱課税、背任、資源の無駄など、国家財産の略奪も空前の規模に達した。政府と人民の間では情報も権力も非対称なため、大量の公共資産の損失と浪費が生じている。共産党内部には、せいたくやごますりがはびこっている。中国社会

のさまざまな政治矛盾(党内矛盾、党内と党外の矛盾、党と政府の矛盾、中央と地方の矛盾、党と人民の矛盾、政府と市民の矛盾など)のなかで、主要なのはやはり、党と人民の矛盾であろう。胡錦濤主席が、社会主義民主法制を「和諧社会」の九大目標の第一に掲げているのは、こうした背景からだ。政治赤字から政治黒字に転じなければならない。



全国人民代表大会で政府活動報告を終え、言葉を交わす胡錦濤国家主席(左)と温家宝首相—06年3月、AP

第三は、各種の資源環境の矛盾が激化して、「生態赤字」(環境へのマイナス)

が拡大していること。中国経済の成長は、工業化や都市化も加速させた。中国はすでに、世界第2位の資源消費国、資源輸入国、汚染排出国である。中国国内で人間と自然のギャップが拡大した結果、地球環境にも大きな影響が及んでいる。胡錦濤主席が緑色発展モデル(資源節約型で環境にやさしい社会を建設し、循環経済を進展させる)を提起しているのは、こうした背景からだ。生態赤字を生態黒字に転じなければならない。

第四は、グローバル化する世界経済に

中国がすっかり組み込まれた結果、ほかの国々とのあいだで不均衡が深まり、中国の貿易黒字が拡大していることだ。中国は、WTO加盟前の2000年に、輸出額が世界第8位だったが、2005年には日本を抜いて第3位になった。豊かな国々、特にアメリカが巨額の経常赤字を重ねるいっぽう、中国や石油輸出国は巨額の経常黒字を計上している。中国の経常黒字がGDPに占める割合は増え続け、2001年の2.8%が2006年には8.5%になると見込まれる。中国とEU、アメリカ、日本との貿易不均衡は、製造業が地球規模で大移動しつつあり、それにもなって資源貿易の不均衡が生まれていることを反映している。胡錦濤主席が、中国が、平和な発展の道を歩む、Win-Win関係の対外開放戦略を提唱しているのは、こうした背景からだ。貿易黒字から、貿易バランスに転換するのだ。

中国はまたとない発展の機会を手に入れているが、同時にかつてない厳しい挑戦にも直面している。胡錦濤主席の「機会をとらえ、挑戦にこたえる」という基本戦略(「社会主義調和社会の構築に関する若干の重大問題についての中国共産党中央の決定」2006年10月11日第16次中央委員会第6回全体会議)は、こうした状況を踏まえてのものだ。これは、中国躍進の基本モデルであり、また、中国躍進の原動力ともなるはずだ。

(橋爪大三郎・東京工業大教授訳)



## 胡锦涛面对的四大挑战<sup>1</sup>

胡鞍钢<sup>2</sup>

中国进入经济起飞和社会转型时期，从 20 世纪 90 年代下半期，出现了许多长期性结构性发展挑战：

第一，经济迅速增长，而各类社会矛盾凸现，社会赤字在扩大。首先出现前所未有的国有和城镇集体单位“下岗洪水”（累计超过 6000 万人）；其次，居民收入和家庭财产在迅速扩大之时，其相对差距和不平等进一步扩大，是建国 50 多年以来最大记录；再有，各类主要社会指标变化都反映了 13 亿人口的中国，人与人之间的差距在扩大，人与人之间的社会矛盾在扩大，人与人之间的社会赤字在扩大。这就是胡锦涛要在 2020 年建立社会主义和谐社会的社会背景，旨在从社会赤字转变为社会盈余。

第二，共产党的执政能力在改善，而政治资产在流失，政治赤字在扩大。在中国政府在稳定宏观经济、应对亚洲金融危机、处理 SARS 危机表现了充分的自信和越来越高的执政水平。但是他的最大敌人是来自内部的“掠夺之手”和腐败。经济迅速增长导致国家财富（公共财政、公共投资、国有资产、国有资源等）迅速积累，也为腐败、寻租、非法流失、无效率使用或低效率支出等掠夺性国家财富提供了空前的机会，在信息不对称和权力不对称情况下，造成大量的公共财富损失和浪费。此外，党内相当盛行政绩风、浮夸风、奢侈风、攀比风，

<sup>1</sup> 此文应日本《每日新闻》之约而作，写于 2006 年 11 月 24 日。

<sup>2</sup> 作者系中国清华大学国情研究中心主任。

在从贸易盈余转变为贸易平衡。

总之，中国面临的发展机遇前所未有，面临的挑战也前所未有。

2006-1-②

屡禁不止。在中国社会各类政治矛盾（如党内矛盾，党内与党外矛盾，党与政府矛盾，中央与地方矛盾，党与人民矛盾，政府与公民等）中，主要矛盾依然是党与人民矛盾。这就是胡锦涛把完善社会主义民主法制作为和谐社会九大目标之首的政治背景，旨在从政治赤字转变为政治盈余。

第三，13 亿人民生活水平在迅速提高，而各类资源环境矛盾凸现，生态赤字在扩大。中国不仅经济高速增长，而且工业化在加速，城镇化在加速，已经成为世界第二大资源消费国和进口国，世界第二大污染排放国和污染损失国，也是中国历史上生态破坏、环境压力最严重时期，反映了中国内部人与自然之间的差距越来越大，以致开始影响世界范围的人与自然之间的差距。这就是胡锦涛提出绿色发展模式（指建立资源节约型社会、环境友好型社会、发展循环经济）的生态背景，旨在从生态赤字转变为生态盈余。

第四，中国大规模参与经济全球化，而与其他国家和世界之间产生越来越显著的不平衡，贸易盈余在扩大。中国在加入世界贸易组织之前的 2000 年货物进出口居世界第八位，2005 年上升为第三位，超过了日本。全球经济不平衡性特征发生了巨大的变化，富国特别是美国巨额经常项账户赤字，而中国、石油输出国巨额经常项账户盈余，中国经常项账户余额占 GDP 比重不断提高，由 2001 年的 2.8% 到 2006 年可能在 8.5%。中国与欧盟、美国和日本货物贸易不平衡反映了全球制造业发生大转移，也引起资源贸易不平衡和大转移。这就是胡锦涛提出走和平发展道路、实施互利共赢对外开放战略的国际背景，旨